

DXの必要性、課題テーマにシンポジウム

DX from KUMAMOTO

崇城大学IoT・AIセンター、肥後銀行IoTセンター、通信事業者ほか情報・通信事業者らで組織するDX推進団体・DX from KUMAMOTOは7月23、24日の両日、DXについてのシンポジウムを開催した。

地方でのDXならびにイノベーションに向けた課題などをテーマに、2日間にわたり意見発表、セミナーなどを行ったもので、名称は「DX from KUMAMOTO」

「DX from KUMAMOTO 2022」。会場は熊本市中央区下通1丁目のスタートアップハブくまもと。大西一史熊本市長、星合隆成崇城大学IoT・AIセンター長はじめ、産学官から11人が登壇。それぞれの専門分野からDXならびにイノベーションの必要性、課題、取り組み事例などについて発表した。なおシンポジウムの様子はネットを通じてオンライン配信された。



▲特別講演で登壇した星合隆成崇城大学IoT・AIセンター長(右)、塩谷幸治NECソリューションイノベータ(株)プロフェッショナルフェロー(左)



▲シンポジウムの様子はオンラインで配信された

九州で初のメタバースコンテスト

崇城大学IOT・AIセンター

崇城大学IOT・AIセンター(熊本市西区池田4丁目)は7月28日、九州内の大学では初のメタバースコンテストを開催した。

200人、26チームが出場。チーム毎に制作したメタバース(仮想空間)デザインとスピーチ力を競った。

IOT・AIなど、最先端技術を活用し、社会課題、地域課題を解決できる人材育成を目的に実施したもので、九州内の大学では初。

メタバースとはネット上に構築された3次元空間で、アバターと呼ばれる自分の分身を介して、仕事や趣味、商品の購入など、現実

当日は崇城大学IOT・AIセンターを会場にコンテストを実施。情報学部生160人と芸術学部生40人の計

世界同様の社会生活の場をインターネット上に構築するもので、6年後世界での市場規模は、100兆円に達するとの見方もある。



▲崇城大学学長賞を受賞した、情報学部1年生からなるチーム・21班



▶コンテスト会場では、立体的で臨場感のある、四季をテーマとした映像作品の数々が、会場全体に映し出された